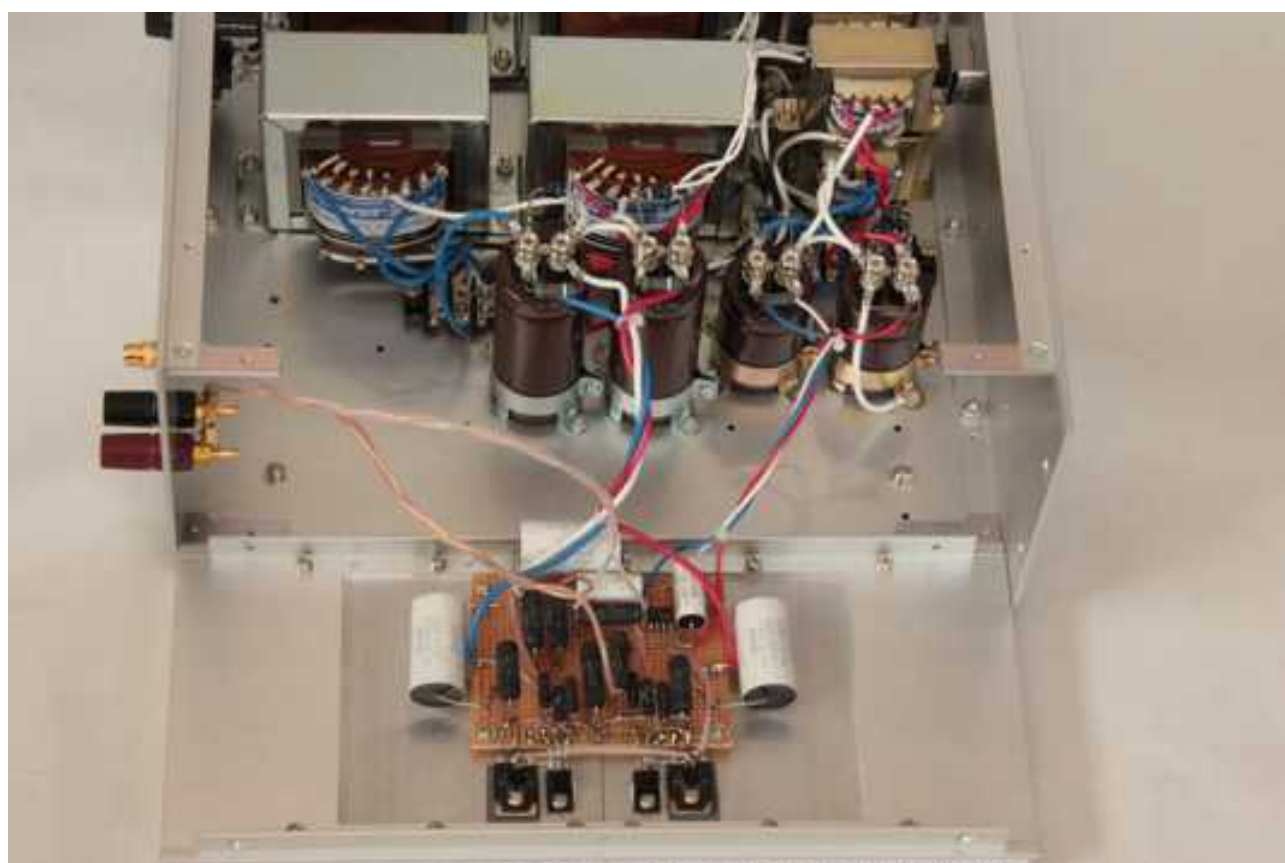
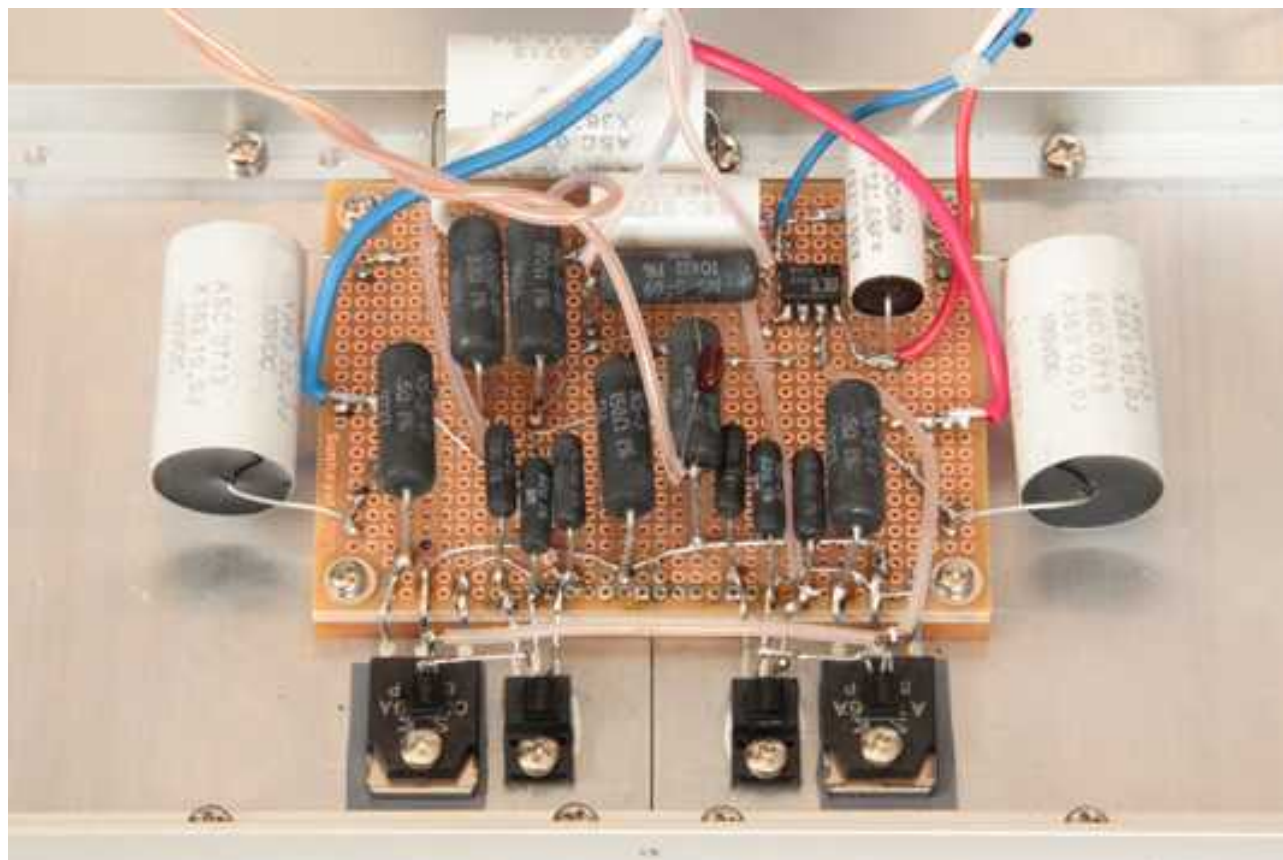


ラジオ技術 9月号パワーアンプ



電源スイッチが乳白色ですので「白のアンプ」と呼んでいますが、8月号「赤のアンプ」が完成したあとで、渡辺明禎氏のトランジスタ技術の記事（2003年のオリジナルではなくて、トランジスタ技術

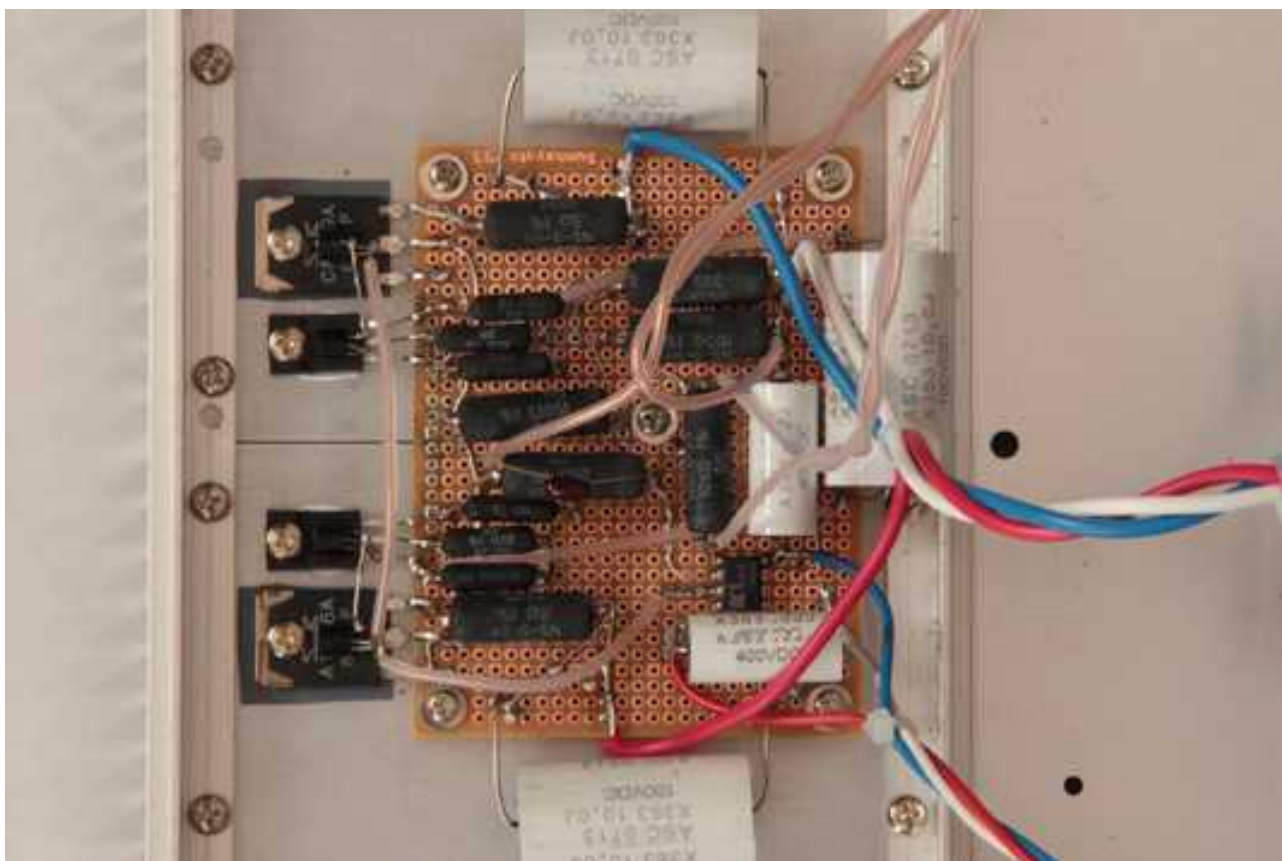
2009年5月号の別冊、オーディオ回路実例集)を見つけ、「おお！いいアイデアだ」と試みました。

余談ですが、トランジスタ技術は毎月購入しているのですが、この別冊は買ったときにはパラパラとめくっただけで、気にも留めていませんでした。ところが、アンプのアイデアを探してめくると、そこにすばらしいアイデアがあることに気づきました。探していないと何も見つけることができない典型ですね。

私は、ただの電線とエミッタフォロワの音を比較した経験(トランジスタの比較を始めた頃には、こうやって聴いていました。この頃はアンプ基板から線を引き出して、真鍮の棒の上に並べたトランジスタに線を付け替えて聴いています)から、エミッタフォロワを使いたくない、と思うようになりました。そこで、アンプの終段にエミッタフォロワを入れなければどうだろうと試みたのですが、イコライザ・アンプなどはうまく動作させられましたが、パワー・アンプはうまく動作させられませんでした。20年ほど前のことなのではっきりと覚えてはいませんが、アイドリングを安定させられなかった記憶があります。ですので、渡辺氏の局所的なフィードバック・ループを見た瞬間、じつにうまい方法と感心しました。

で、試作すると、なかなかの音がします。

「白のアンプ」は、「赤のアンプ」と比べ、良く言えば広帯域、悪く言えばドンシャリです。中高域がわずかに霞む感じがありますが、1つ1つの音のクリアーさ、明確さはベターです。低域の量感はだんぜん優れます。それも、パワーっと出るのではなく、くっきりとした音の形が感じられます。



この「白のアンプ」の回路のトランジスタを真鍮で挟んだらどうなるか。乞うご期待。

